
グラコロ

千住夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グラコロ

【Nコード】

N7252Y

【作者名】

千住夏樹

【あらすじ】

僕はいたって普通のどこにでもよくいる普遍的な高校生だった。普通とか一般的なとかを具現化すると僕になるみたいな、まあそんな感じのどこにでもいそうな男子高校生だった……あの日までは……。

? 実存障壁 (シールド・バリア)

? シールド・バリア
実存障壁

僕はいたって普通のどこにでもよくいる普遍的な高校生だった。普通なとか一般的なとかを具現化すると僕になるみたいな、まあそんな感じのどこにでもいそうな男子高校生だった……あの日までは……。

都内ではまあわりと歴史があつて……かつては東大に何人もの現役合格者を出していた……それなりに偏差値の高い進学校として認知されている程度の公立の高校に4月、無事に入学した。

で、本好き、読書好きな僕は迷わず文芸部の門を叩くわけだ。

スポーツは苦手だ。人付き合いも苦手だ。唯一の夢中は読書とネットの中……知り合えば、適当に仲良くなれるし、適当に馴れ合えるし、なにより現実の匂いがしない。僕は現実の人間臭が嫌いなのかも、彼女も生まれて十六年いたためしがないし、そもそも現実の女の子って僕には荷が重過ぎる。

唯一の女友だちと言えば保育園から高校まで一緒に幼馴染の遠山梓あずさくらいのものだ。

まあ彼女となら構えずに口が聞けるし、梓に対しては女の子だって意識もあまりない。

松涛高校、文芸部。そこには学内のクラブとして認知される最低構成要因の5人しか部員は居らず、三年生の部員が二人抜けるといよいよ同好会に成り下がるような学校一の不人気クラブであり、部室もそれなりに旧校舎のボロボロ、その薄暗い廊下を渡ると、ギシ

ギシ音がするような、それは、それは、ひどいものだった。

校舎内外で行われる人気のあるクラブ員総出の部員勧誘合戦にも全く参加せず、校内の掲示板の片隅にワードで適当に作ったと思われる部員募集の張り紙があるだけ。

もちろん入部希望者は呼ばれるまで廊下で待つようになんて仰々しい張り紙が、悲しく剥がれそうになりながら、無人のパイプイスが三脚空しく置かれていたとしてもなんの不思議もなかった。

二つ先の「軽音学部」の部室からは歪ませたエレキの音と女子生徒の華やいだキャツキャツなんて歓声が時おり聴こえるつてのに、文芸部の部室からはなんの物音もしない。

恐る恐るドアをノックした。

「あのー、誰かいますか？」

返事はない。どうやら屍のようだ。

ノブを回した。ドアが軋んだ音を残し開いた。

室内にいた二人の視線がゆつくりとこちらを向く。興味なさげに、数秒後には読んでいた文庫本に視線を戻した。

「あのー入部希望なんですが……」

柔らかい日差しを受けた窓際には、赤い縁の眼鏡をかけたシヨートヘアの見るからに本の虫つて感じの地味な女子、左の会議用テーブルには長髪の銀縁の眼鏡をかけた男子、どうやら二人だけのようだ。

「あのー入部したいんですが……」

再度の問いかけに窓際の女子に睨まれた。

やれやれと言った調子で、ようやく腰を上げた銀縁眼鏡の男子が僕の前に『入部届け』と書かれたA四用紙を置いた。

「まあ、一応、歓迎すると言っても言っておこう、都立松涛 新生君。都立松涛
高校第一文芸部へようこそ。あちらが文芸部部長のながたゆきこ 長田有希子、僕
が副部長のおおいすみむつき 大泉睦月」

長田由希子が一瞬だけ僕を見、微笑んだ。かわいい、かなりの美
形なんだとこの時気付いた。

「まあ部長も僕も三年から引き継いだばかりでね、この部もこの旧
校舎も百年の歴史があるんだけど……」

入部届けに目を通しながら僕は長田由希子をチラ見する。

眼鏡の奥に理的で底なしの井戸みたいな瞳が広がっていた。学
校指定のチェックのスカートから剥き出しになった適度に肉付きの
よい太ももと紺のソックスに包まれたくるぶしはあくまでも細く、
黒のローファーはこれでもかかってくらいピカピカに磨かれていた。

「新人君、歓迎はするけれど、わたしの脚に、その無遠慮な視線向
けたら、今度はただじゃ済まないから、憶えておくといいと思う。

いえ、忘却するとひどい目に会うかも」

「い、い、いえ、見てません！」

見てたよな、確かにその太もみに、あるいはその長い脚に釘付けだ
ったよね、と言う視線で大泉睦月がニヤニヤしながらこちらを見て
いたとしてもなんら不思議ではない。

「新人君、気をつけたまえよ、うちの部長は剣道部の主将も兼ねて
いるからね、美人で聡明、そして文武両道に長けている。柳生新陰
流、二十三代師範の家柄であり、新陰流免許皆伝、人生で最も嫌い
なものはゴキブリと無遠慮な視線だからね」

「大泉君、そういった饒舌も大嫌いだから、沈黙こそ金よ、憶えて
おいてね」

大泉睦月の顔がみるみる赤く染まっていったのはなにも沈みかけの
夕陽のせいだけでもあるまい。

副部長が長田由希子を気にしながら耳打ちする。

「……まあそういうことだ。冷静沈着な僕でもたまにご機嫌を損な
うこともあるってことだ。ふむふむ、涼ノ宮ひかる君か……それと、

一応入部テストがあるから、一番下の但し書き、入部テストの項を熟読したまえ、なにたいしたことじゃない」

確信犯だった。最下段に朗かに最小フォントサイズで入部希望者への但し書き（入部テスト）としてこう書かれていた。

『但し書き：入部希望者にはテストとして文芸部、部室倉庫清掃を命じる。これは部活の一環であり、部員の総意である。』

「帰るわ、大泉君、あとよろしく。部室の鍵、宿直の先生に返しておいてね」

立ち上がった長田由希子は意外と背が高かった。眼鏡フェチにはたまらないだろうな……なにより脅威のミニスカート率だった。

「うっ！」
みぞおちに一発喰らった。あざやかすぎる回し蹴り。膝から崩れ落ちた。

「そんなに女子高生の脚が珍しい？ ヘンタイクン、無遠慮な視線は死刑よ、いいシ・ケ・イ 分かった？」

声も出なかった。息すらできない。

「うっむ、涼ノ宮君。なかなか見所があるね。部長の蹴りを喰らって気絶しなかつたとはね、くふふ、それとも部長に気に入られたかな？ とっさに急所を外したのかも知れない」

「か、顔が近いです。先輩……うくくく……」

「先輩？ うっむ、なかなかいい響きだ。まあ、とりあえずそういうことだから倉庫の清掃よろしく。部室の鍵は部長のロッカーに入ってるから、帰りに返しておいてよ、じゃあね……ああ、先輩ってもう一回言ってくれるかな涼ノ宮クン」

「せ、先輩……お、お疲れさまでした」
鼻にかかったクンってのがきもいなんて思ったけれど、そんなことを口に出す勇氣はもちろん僕にはない。

痛む腹を押さえて二人のテーブルに目をやると文庫本が二冊。

長田由希子は『金閣寺 三島由紀夫』 大泉睦月は『ブライアン・W・オールデイズ 地球の長い午後』
両方とも作家すら知らないものだった、いや、三島由紀夫なら確か潮騒は読んだことあるな、蛇足その一。

小一時間ほどその場から動けなかった。夕暮れの情景に部室は赤く染まっていた。仕方なく部室の奥の『開かずの間』と書かれた倉庫に向かう。

元来僕は素直だし、とりあえず僕はこの部室が気に入ったわけで、掃除だつて別段嫌いなわけじゃない。
ドアを開ける。一瞬カビ臭い匂いにたじろぐ。きつと去年の入部希望者が掃除して以来全く手が付けられてなかったんだろう。ひよつとすると去年、掃除したのは大泉睦月かもしれない。そう思っただけなのだが。

倉庫には種々雑多の主に単行本、文庫本の類なのだが、乱雑に積み上げられていた。

卒業生の置き土産の類かはたまた残骸か……。
でかい目がこつちを睨んでいる。カ、カエルだと!? カエルの着ぐるみが四体、いったいなんに使ったんだろう? ウィンドウズ98なんかが積まれてそんな古代遺産みたいなパソコンまであった。文芸部の先輩たちの大いなる遺産……あるいは大いなる眠りか……。
で、正面の古びたコルクボードにはメモ。

『いでし勇者よ、汝の幸運と武運を……時の神、クロノスの慈悲を、有限なる時の流れに、整理整頓を実行せしもの、すなわち、それは神の処遇なりや……シシユポスの徒勞ならんことを祈る。できれば、系統だった整理をお願いしたい。今は亡き文芸部卒業生一同より』

夢中で掃除していた。先輩たちの会報があつたり、何十年も前の

卒業アルバムがあつたり、手を休め、それらを読みふける時間のほうが多かったかもしれない。

天窓からは満月が覗いた。そして、星々の瞬き……… いったいどれほどの時間を過ごしたのか、帰ろう、いい加減に……… 天窓からこぼれる一筋の灯りが真っ暗な隅っこ……… きっと何年も誰にも見向きもされなかったであろう……… を照らした。

埃がたまり、薄汚れた分厚い本を見つけた。そこに光が集中していたからだ。

やっと手が届く、かなりの重量だ。

手で埃を払うと不釣り合いなほど装丁が豪華な本だと分かった。高価なんだろうな、きっと。

薄暗くて題名がよく読めない。

ほんのお飾り程度の天窓からこぼれる薄明かりに照らしてみた。

確かにこう書いてあった。

『ソロモンの大いなる扉』カリー・ド・マルシエ著、訳者、那須胡瓜なすきゅうり

表紙には題名よりも大きく、注意書きとしてこう書かれていた。

『この書物はいわば、パンドラの箱であり、みだりに開けること違わず、封印せしあまたの密書と同じく悪用すべきは汝の心根に従う。半端なる心根で開くこと違わず。すなわち現世をなきものにする力を与えられんことを肝に銘じよ』

大げさな文言、こういう注意書きが書かれた書物って大抵、まゆつばでまやかしものと古来から相場が決まっている。もちろん僕は開いたさ、最初の一ページを………。

それは、簡略に言くと、魔術師のための悪魔を召喚する指示書、あるいは、そのための奥義が仔細に書かれていた。

僕はそれを学校指定のセカバンに突っ込んだ。もう開いてしまっただから、読まねばならない。そんな気がした。で、僕は一週間かけてそれを読破した。

倉庫清掃という入部試験に見事に合格して僕は晴れて文芸部の部員になった。

結局、僕が片付けた跡を、長田由希子も大泉睦月も一度も見もしなかったのだが……。

あれ以来、毎日文芸部の部室に顔を出した。放課後の数時間、ただただ好きな本を読む、それだけのことなのだが、居心地がよかった。

長田由希子にはあのあと二度みぞおちに蹴りを喰らった。無遠慮な視線を浴びせたからだという彼女の言葉に反論の余地はなかった。純文学好き。

なんだかんだ言いながらも僕は、大泉睦月のことも好きになった。別に性的な意味じゃない。僕にその趣味はない、多分ね。SF、ミステリ、ラノベ好き。ラノベっていう総称が嫌い、なぜジュブナイルのままではいけないのかと思ってるそう。

なにより冷静で頭が切れる。ただ長田由希子が同席しているとどうやら冷静ではいられないらしいのだが。

時折り交わす長田由希子との文学論ではいつも最後にはクチをつぐんでしまう。そういう大泉睦月が僕は好きだ。

入学式の興奮も収まり、いつもの日常が始まっていた。平穏で退屈な日常。

河川敷をチャリを漕ぎながら平凡を確かめる毎日。

部活のない日は遠山梓とたまに帰ったりする。

「部活どう?」

「うん? ああ、楽しいよ」

「彼女でもできた?」

「知ってるくせに」

「あははは、グラコ口もてないものね」

「グラコロって……もう高校生なんだぜ僕たち」

「いいじゃない、マック限定グラコロ・バーガー大好きだったでしょ……わたしだけの特別の呼び名なんだから、グラコロ君、寄ってマック？」

「止めとく、読みたい本があるんだ」

「クラスの男の子たち五人から告白されたのよ、彼氏がないんなら付き合ってたって」

「へえー、で、どうしたの？」

「全部断ったわ、なんか違うんだもの」

「へえー……」

いつも梓のほうから誘ってくれるんだけど、多分、恐らく、二度に一度は行かないと言ってるような気がする。

で、梓は一瞬悲しそうな顔をする。

僕はきつとそんな梓の悲しそうな顔を見るために断っているのかもしれない。

梓は僕が見ても、いや誰が見たって充分かわいいのになんで僕なんかに関わるのか……僕なんてどこにでもいそうなやつだろ、平凡で普通なんだぜ、つまらなくないのかい？ 一緒にいて……。

そんな平凡に飽き飽きしてたのかも知れない。そんな自分の平凡さに……。

教室から覗く夏空…… 蛸がうるさい、夏が近い。空はあくまでも高く、はぐれ雲がゆっくりと西から東へとなびく。

今日は一日中、雨だった。

部室で無言で好きな本に耽溺する。聴こえるのはページをめくる音だけ。長田由希子の脚を気付かれずに見る術を憶えた。大泉睦月の顔を近づけすぎて喋る癖をなんとかして欲しい。

暫く、窓を伝う雨の雫を目で追う。

目線を上げると『開かずの間』の張り紙……。

頭のすみにこびりつくあの書物。見つけて以来、脳内の半分を占拠

する『ソロモンの大いなる扉』。

手順は頭に入れた。やってみたい、単純にそう思った。魔力が半端なものは魔法陣をできうる限り大きく描けと書いてあった。

魔力なんかない僕はいつたいどのくらい大きな魔法陣を描けば召喚魔術が使えるんだ！？

この密書を開いたものにはご加護が一度だけ訪れるとも書いてあった。もしも成功するとしたらできるだけ大きな魔法陣を描くしかない、それも一度きりのチャンスに賭けるしかない。

大きな広場で一度つきりのチャンスを試そう。そう、思った。なるべく大きな魔法陣を描こう、そうも思った。

浮かんだのは廃校になった松涛第二小学校のグラウンド。人口減少で隣の地区と合併して今はもうない。僕が六年間通った小学校。今後は老人ホームになるべく改築の真つ最中。だから真夜中に人はいない。

あそこなら直径五十メートルくらいの魔法陣が描ける。決行は今週土曜日深夜。召喚魔術の文言はすべて暗記した。もちろん百ほどもあるんだけど、当座に使うやつだけだ。

約束の土曜日深夜。景気づけにエヴァの警報音で目覚める。チャリはすでに用意済みだった。

全速力で漕げば十分。グラウンドの片隅には鍵のかかっていない物置。ライン引きと石膏の袋を持ち出す。

胸が張り裂けそうなほど緊張していた。

自分の鼓動に驚くほどだった。二時間ほどで本にあった魔法陣を正確になぞった……つもりだ。

呼吸を整え、円の中心に立った。雲間から覗いた満月が囁いているように見えた。

精霊たちの時間だ。

「精霊たちの名において召喚する、黒き闇、明けの明星、あらゆる宇宙の森羅万象、そ、そ、そ、その他、万物の守護の名の元にわれは求め、訴える。いでよ、われのもとにひれ伏し、喚起せよ……」

魔法陣にはなんの変化もなかった。あるわけないとも思っていた。これが現実なんだ。現実には神も悪魔ももちろんいないし、人は死んだら灰になるだけ。

もちろん天国や地獄だってありはしないし、有名なラノベの主人公に念を押されるまでもなく赤服を着た好々爺などとうに現実の手垢にまみれたままドブに捨ててしまった。

「リアルってのはこんなにもつまないものなんだ！」
思わずそう叫びそうになった。なにが魔術の指導書だよ、嘘八百並べやがって、だいたい、どんな先輩なんだ？ こんな高価なネタ本買い込んで部室の肥やしにしたやつって……。

夏の大三角、デネブ、アルタイル、ベガが天空で瞬いていた。流星群でもあったのか……やけに流れ星が流れた。一つ、二つ、三つ……七つ、一陣の風が舞った。夏の匂いを含んだそれは女性名詞を与えられてもいいほどの甘いそよ風、そして、さらに、唯一東京でも感動的なくらいこの時間は星がキレイだ。

まあこれだけの星空が見えたんだから、あながち無駄な時間ではなかったなどと自分を慰めながら、校庭のフェンスをよじ登ろうとした瞬間、背後の闇から声がした。

「わたしを呼んだか」

木陰から声が確かに聞こえた。女の子の声だ。振り向くと暗闇の中に人影があった。

「誰！ 呼んだおぼえなんか……？」

こんな真夜中に誰を呼ぶって言うんだ！？ ま、ま、まさか、まさ

か……！！

「呼んだくせに、こんな真夜中にいったいきさま以外に誰がわたしを召還したというのだ？」

「ま、まさか本当に召喚したのか、僕が！」

「だからさ、きさま以外に誰がいるって言うんだよ！ きさまの中途半端な魔力のおかげでわたしっいたら着るものすら具現化できずに素っ裸でこんな木陰に隠れなきゃならない。本来ならなんらかの^シ実存障壁ルド・バリかなんかで覆われてなきゃならないのに、この体たらくはなんだよ、ほんとにもう……下着すら実体化できないほど脆弱な魔値で、なんでわたしが……とにかく、なんか着るものよこせよ」

僕はあわてて三本線のジャージを声のするほうに投げた。
ゴソゴソ音がしてようやくしその影が姿を現した。

真昼の猥雑な光の束ではなく、死した満月の清浄な光に包まれたそれはこの世のものとは思えぬ妖艶を放っていた。絶世の美少女がそこにいた。

僕の三本線を羽織ってモジモジしているその姿にはえもいわれぬ美しさがあった。

「か、か、か、かわいい！」

「当たり前だろ、きさまがそう望んだ姿そのものだもの。きさまの虹元的脳内の具現化がわたしだ」

ボツティチエリがここにいたらまさにビーナスの誕生と叫んだであろう姿がそこにあった。僕の手の届くところにだ。

「漆黒の肩まで無造作に垂らしたロングヘア、身長は百五十八センチ、体重四十三キロ、バスト七十九センチ、ウエスト五十九センチ、ヒップ七十五センチジャスト。くつきりとした二重まぶた、目の色は深い井戸のような藍色、唇はふっくらとしたピンク、お尻は桃でできている。これ以上望むべくもないほどのきさまの憧れの具現化だぞ！」

言葉は乱暴だけれど、まさに声は僕設定の声優の声音であり、女の子の声音に慣れてない風な趣だった。

三本線のスソでなんとか隠そうとする姿がかわいい！ 剥き出しの太ももは細く、続く裸足の足先までは長く、あくまでも純白、月明かりに照らされたそれはまさに女の子はかくあるべきという僕の理想の姿だった。

愛くるしいという形容以外に考えられないそれはだんだん僕に近づく……。

唇が触れた。まさにそよ風を思わせるような、天使の羽みたいな軽々としたキス。

「こうして欲しかったんだろ？ なんなら脱ごうか……考えただろ今、こんなかわいい唇が触れたらどんな感じなんだろうとか、裸が見たいなとか、セックスのこととか……」

「ほ、ほ、ほ、本当に現れるなんて思ってもみなかったもんだから……す、す、すまない。まだ頭が混乱してるんだ。今、逢ったばかりで、セ、セ、セ、セックスなんては、は、は、早すぎるし、考えてもみなかったし」

「そうか、きさまの脳内の思考の半分がそのことばかりだったのだから、つい口から出てしまったのだ。そうかキスだけでよかったのか？ 裸が見たいのではなかったのか？ セックスというのは会ってすぐやってはいけないものなのか？」

「だいたい、普通の、普遍的な、一般の五体満足で健全な十六歳の高校生なら脳内の半分は、その、その、性に興味を持っていて当たり前で、しかるべき状況だと思われ……」

遮られた。
「まあ御託はもういい。ところできさま正式にわたしと契約を交わすのだな、もちろん……正式に契約を交わせば、令呪によって汝のしもべとなさん。以後、わたしはきさまの奴隷となる。きさまの命

令とあらば人をも喰らう、獣となるぞ」

言いながら顔をよせる姿はまさに羊の皮を被った悪魔そのもの、その上に外見は素っ裸の十六歳の女の子、その妖艶な姿に抗えるものなどいるはずもない。

「そうそう、抗おうなんてムリムリ、右手の人差し指でわたしの胸元に一本線を引くだけでよいのだ。そうそう」

言われるままにふっくらと豊かなふくらみの谷間に導かれ、僕は人差し指である形をなぞった。

一瞬、柔らかな肌にミミズ腫れが浮かび、それは、すぐに消えた。

「よし、契約完了だ。これ以後きさまがわたしの主となる」

顔が火照ってるのが自分でも分かった。心臓が早鐘を打った。僕の心を見透かすようにその子は身体を密着する。

「きさまって呼び方はどうも……ひかるでいいよ、ひかるで」

「分かった、以後、ひかると呼ぼう」

まるでジグソーの一片みたいにぴったりとくっつく。凸凹が重なり合った途端四十三キロの体重が僕にしなだれかかった。不思議と重さを全く感じなかった。いや、重さなんか端からなかったのかも知れない。

「ふぁーあああ、すでに活動限界を超えた、たまらなく眠い。きさまの魔値 (maginitude) が低すぎるからだぞ……なんだと？ 名前を聞いてないだ……名前は……ええと、えびる、エビル、慧微流だ。それ以外でもいいぞ、好きに呼べ、以上だ、以下でもない。それが全てだ」

「……慧微流！ 慧微流！ 起きてよ！？ 家とかさ、帰るべき場所みたいなのってないのか？ またぱつと消えちゃうとかさ、ま……ずいだろ、寝るなって……？」

「実体化するだけでも大変なんだぞ、ましてや消えるなんて芸当はきさまの魔値が低すぎてムリ。それに、きさまは一応わたしの召喚

主であるのだからねぐらぐらい確保しろ。全責任はきさまにあるのだ、きさまの家に連れていくしかあるまい……むにやむにや」
「そ、そ、そ、そんなこと、家族にどう説明するんだよ!? きさまって呼ぶな、ひかるだって言っただろ! 慧微流、起きてよ!」
「うむむ、むにやむにや……おんぶ……」

結局僕はチャリを押しながら寝てしまった慧微流を、背中にしようという、はたから見れば、どう見たって不審人物にしか見えないような寓居をおかし帰宅した。

首に巻いた慧微流の腕から、まるでそこだけがグラビティ・ゼロみたいな領域があつて抱えた僕の腕には、全く重さが伝わってこないリアリティのないグラビティ……でもその押し付けられた胸の感触はジャージー一枚を通して確かに伝わってきたし、胸の鼓動だつて、体温だつて、それが現実あるいは実体のあるものだということを伝えていた。

こんな真夜中にジャージー一枚の女の子を抱えて、しかもママチャリを押しながら、一度も職質を受けなかつたなんて奇跡に近い。

どうも見回り中の警官は夜中にママチャリを漕いで帰宅する高校生には灯火の如何に関わらず盗難された自転車と思ひ込んでいるふしがり、僕はそれまでにあらぬ疑いを何度もかけられ、もちろん何度も職質を食らつたものだ。

玄関をそーっと開けると、しゃみが胡散臭そうに僕を眺め、さらに背中にしよつている慧微流を眺め、僕にお決まりの小ばかにしたような一瞥をくれて、さつさと二階に上がっていった。

しゃみは拙宅が飼っている三歳のメスのアメシヨで正式名称はしゃみせんと言う。

二つ下の妹、まなみの寵愛を一身に受け、僕よりも家族には請けが良く、待遇もずつといい。

家人はさすがに寝ていて僕は安堵のため息をつかずにはいられなかった。

いやいや、安堵のため息すらつく余裕は今の僕にはない。

とりあえず僕はなんとか慧微流を二階の僕の部屋のベッドに寝かすことができた。

慧微流はふとんに包まると、さっそく着ていた三本線を脱ぎ捨ててよこした。

こつこつというタイプの服は気に入らないらしい。スオツシユ・マークならどうだ？

つ、つまりは、あのため息が出るほどのステキなスタイルの女の子が僕のベッドに素っ裸で寝ているという状況ができあがったしまつたわけだ。

さて、どうしたもんだろ？ 朝になってこの状況をどう説明したらいいんだ！ いやー道端に女の子が落ちててさ、かわいそうだからさ、拾ってきたよ。なんて、言えるわけじゃないか、ははは、笑うしかないな

……ははは、しかし、かわいい寝顔だな、寝息すらかわいい。

いやいや、召喚魔術つてやつでさー、指導書の通りやつたらさ、女の子が呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーんなんてさ……バカだな、こんなバカだったなんて思いもしなかったな、バカだな僕は

慧微流だつて得体が知れない。だいたい僕に魔力なんてもんがあるのか？ なぜ召喚できたんだ！？ 彼女は果たして神なのか、天使なのか、精霊なのか、悪魔なのか、はたまた、他のなにかなのか、まあエビルつて名乗るくらいなんだから悪ではあるんだろうな、しかし、本当に彼女は彼女なのか？ まさか男なんてことはないよな！？ なかったよな確か！？ あれはなかったはずだ。まさか僕の脳内の理想形を实体化してくるなんて思いもしなかったな。

おかげで一目見て惚れちゃったじゃないか！

うわっ！ 寝返りうつたら桃みたいなお尻が丸見えになったじゃないか！ うわっ、背中から足先まで出しちゃったよ、どうすんだよ、風邪引くじゃんか……。

慧微流がゆっくりと振り向いた。上目遣いに僕を見つめる……その、長い睫毛、濡れた瞳に見つめられて抵抗できるやつなんているんだろうか……。

「むにゃ、むにゃ……さ、さ、寂しいの……、一緒に寝よ……抱きしめてくれるだけでいいんだ……むにゃ、むにゃ」

こ、こ、こいつ……僕の心を……よ、よ、読んでるのか……な、な、なんだその萌えセリフ。り、り、り、り、理性が、吹っ飛びそうだ。

ええい！ どうにでもなれた。目をつぶったまま僕は慧微流の横に滑り込む。

それを待っていたように慧微流が首筋に腕を回した。のしかかる慧微流が言う。

「会ったばかりだから、セックスはしちゃいけないんだよね、ひかる……むにゃ、むにゃ……」

ぴったりと重なり合うジグソーの一片同士……相変わらず慧微流には重さがなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7252y/>

グラコロ

2011年11月21日20時49分発行